

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ一人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

ことばが生まれる時

2022年3月3日、京都のロームシアターホールで、全国水平社創立100周年の記念集會が開催された。このホールのすぐ横に岡崎公会堂のレプリカがどっしり建っていた。この地で、この公会堂で、100年前に「全国水平社」が発足したのです。生きている間に、もうこんな集會に出るチャンスはないと思い、私は新幹線に乗りこんだ。記念集會のオープニングは笛と太鼓による吉祥院六齋(きっしょういんろくさい)念仏踊りであった。長い間、部落差別によって吉祥院天満宮の舞台で踊ることを禁じられてきた踊りである。誰にも教えてもらえない悔しい思いをはねのけながら、見よう見まねで大人から子どもへと伝承されてきた歴史があるという。

次には俳優の峰蘭太郎さんによる、力強い「水平社宣言」の朗読の聲が会場びっしりの人々に響きわたった。

日本初の人権宣言といわれ、「解放令」後も過酷な部落差別を受けてきた被差別部落の人々の自らの尊厳と豊かな人間性をとりもどそうという誇りにみちた宣言である。なかでも、私がジンジン心打たれるのは「人の世の冷たさが、どんなに冷たいか、人間をいたわることが何であるかをよく知っている

吾々(われわれ)は、心から人生の熱と光を願求礼賛(がんぐらいさん)するものである」というところである。さらに続く「人の世に熱あれ、人間に光あれ。」という最後の一行はすべての人間の尊厳をたたえた言葉として世界的にも広く知られている。

「解放令」(1871年)から51年後に、被差別部落の人々によって「水平社」が結成され、その時から50年経過した1972年前後に差別解消をめざして教科書に初めて部落問題が記載された。

現在も、ネット上などでさまざまに差別的な言動が飛び交い、根深い結婚差別などが残っていることを想えば、解放令から水平社結成までの50年は、日常の中で、ひどい差別的な状況があったことが想像できる。

水平社の結成に向けて、立ちあがった人々は「よき日の為に」という水平社創立趣意書をつくり、「起きてみる、夜明けだ」と、部落解放の夜明けが来たことを訴えた。表紙には「芽から花を出し大空から 日輪を出す 歓喜よ」とある。この、他の言葉に言い換えがたいシンブルでおおらかな叫びに、私は数十年前も今も息をのんだ。

人が全存在をかけて立ちあがる時、歴史が変わろうとする時、ことばが生まれてくるのだと。

学び直す機会に

全国水平社の結成について、中学校の社会科学の教科書には、「差別された人々は、平等な社会の実現をめざし、みずからの力で差別をなくそうと立ち上がったのです。」と記述されています。子どもたちは学校の授業を通して学んでいきます。さて、私たち大人は、「水平社」の何を知っていると言えるでしょうか？今年を改めて学び直す100年目の機会にしたいものです。

市では「生き生き人権ライフゼミナー」「学びをつなぐ講座」「人権尊重のまちづくりサポーター養成講座」などを開催していきます。ちょっと参加してみませんか？

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは、
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。